

書評

京都大学学術出版会発行

久守藤男 著 定価 3,500円

環境保全と資源利用システム

評者 中西重康*

Shigeyasu Nakanishi

近年、持続的成長 (sustainable development) が一つの合い言葉として頻りに語られるようになった。その大前提となるのは、再生可能な資源の再生利用と環境保全であることはいうまでもないことであるが、それをいかにして現実化するかの道筋は必ずしも明らかでない。この課題はエネルギーに対しては特に困難をもたらすが、もっとも達成への距離が近いと考えられる農業資源においてもそれは容易ではない。

本書は、表紙カバーに「新しい『資源白書』、『農学原論』を提示する」と宣言されているように、書名に現れる「資源」は、ほぼ「農業資源」を意味しており、より広い意味の「環境・資源」を考えた読者には多少期待はずれに終わるかもしれない。しかし、著者の立論の基盤となるのは、H. オダム-E. オダム、玉野井芳郎、槌田敦の理論であって、エントロピー概念を導きの糸とし、定常開放系としての農業システムの資源利用が考究されており、この考え方はもちろん農業に限定されるものではない。

本書の章立てとその概要は以下のごとくである。

第1章 資源観の再検討

経済学における資源観の展開が概観され、生命系の再生機能に力点を置いた資源観を提示される。

第2章 市場経済の発展と資源利用問題

市場経済における資源利用の問題点を経済循環と物質循環の矛盾としてとらえ、エントロピーをキー概念としてそれに分析が加えられている。

第3章 自然と人間を結ぶ農業資源利用システムの視角と構造

定常開放系の立場による農業のシステム論的解析が展開される。

第4章 日本型資源・環境保全システムの展開と近代化

日本農業が独自の資源・環境保全システムを発展させたことがヨーロッパと対比しながら明らかにされる。

第5章 現代農業の資源利用システムの変貌

高度成長下で農業の工業化による日本的システムの変貌が述べられる。

第6章 食品加工・流通業における資源利用の構造的変化と安全性問題

近年の食料輸入増大に伴う農と食の乖離と、その加工・流通過程での労働力・エネルギー利用の問題、および安全問題が検討される。

第7章 持続可能な資源・環境保全社会の創造

以上の総括として「持続可能な資源・環境保全社会の創造」のための課題の検討が行われている。

記述の対象は日本が中心で、特に、高度成長の時期までに日本の農業が世界に類例のない環境保全的で物質循環サイクル的に持続可能な資源利用システムを完成していたことが定量的に証明されている。その手法は産業連関表に基づいて定量的、実証的であり、ここで提示されている間接消費エネルギーのデータは、日本農業のエネルギーアナリシスの結果を与えるものとして貴重である。

第7章は著者の日本農業再生への思いを込めた提言で、本書の締めくくりというよりは恐らく本書が書かれた目的とであろう。その要点は、日本においてかつて確立されていた資源・環境保全型農業の新しい形での復活である。評者の個人的見地からも、資源・エネルギー論的観点から見ればその実現が望ましいと痛切に感じる。だが、問題は、その先、すなわち現在の世界経済の枠組みの中でいかなるシナリオでそれが可能になるのかであろう。この章の記述だけではあまりに簡略すぎて、おおかたの読者の納得を得られないのではなかろうか。著者の具体的な実現可能性のある詳細なシナリオの提示が期待される。

* 龍谷大学理工学部教授

〒520-21 大津市瀬田大江町横谷 1-5